

《醒世姻緣傳》(第 30 回) 訳注 (其二)

植田均、胡玉華、石亮亮、王姝茵、鐘麗華、張恩培、江冰燕

本訳注の書式、文字の字形・字体の入力形式、資料等の略号は前号(『社会文化研究』第14号)の通りである。¹⁾ 即ち、用いたテキスト(影印本)で“着”“却”としていれば小稿では“著”“卻”とはしない。注釈は、重要と思われる語句を取り挙げ、必要に応じて重複して取り挙げることもある。

原文

凡^[1]有這等^[2]死去^[3]的鬼魂^[4]，不許^[5]他托生^[6]爲人，常七^[7]叫^[8]他做鬼^[9]。如^[10]弔死^[11]的頼子拖了^[12]那根送命^[13]的繩，自刎^[14]的血糊^[15]般^[16]搭拉^[17]着个頭，投崖^[18]的拖拉^[19]着少七没人^[20]的骨拾^[21]，跳河^[22]跳井^[23]的自己抱着个甕^[24]大的肚子行動^[25]不得^[26]，在那陰司^[27]裏不見天日^[28]，只除^[29]有了替代^[30]，方^[31]許托生，且還不知托生得好與^[32]不好。若是^[33]没有替代，這是整^[34]幾輩何得^[35]出世^[36]。

校注

[1] 凡:[副]すべて、あらゆる。《兒女》1: 怎奈老爺是個走方步的人，～那些送字樣子、送詩篇兒這些門路，都不曉得去作。

[2] 這等:[代]“这样; 这么”このような、そのような。《兒女》8: 晁老父子見了梁生、胡且～襪縷，吃了一驚。

[3] 死去:[動]死ぬ。《紅樓》113: 趙姨娘一時～，隔了些時又回過來，整整的鬧了一夜。

[4] 鬼魂:[名]死者の魂、靈魂。《紅樓》13: 這四十九日，單請一百零八眾僧人在大廳上拜大悲懺，超度前亡後死～；另設一壇於天香樓，是九十九位全真道士，打十九日解冤洗業醮。

[5] 不許:[連]許さない。《聊齋》3: 未幾引與同衾，九郎～，堅以睡惡為辭。

[6] 托生:[動]“转世; 转生”転生する。《兒女》8: 你我不幸～個女孩兒，不能在世界上烈烈轟轟作番事業，也得有個人味兒。

[7] 常七:[副]“经常; 时常”しょっちゅう。《老殘》5: 他妹夫～在鄉下機上買幾匹布，到城裏去賣，賺幾個錢補貼著零用。

[8] 叫:[動]“让”…させる。《兒女》8: 當下只收了他一匹驢兒，此外不會受他一丝一粒，只～他在這上不在天下不著地的地方，給我結了幾間茅屋，我同老母居住。

[9] 做鬼:[連]亡霊になる。《老殘》14: 俺田家祖上一百世的祖宗，～都感激二位爺的恩典，結草銜環，一定會報答你二位的。

[10] 如:[接]“比如”例を挙げると、例えば。《儒林》56: 雖其中拔十而得二三，～薛宣、胡居仁之理學，周憲、吳景之忠義，功業則有於謙、王守仁，文章則有李夢陽、何景明輩: 炳炳浪浪，照耀史冊。

[11] 弔死=吊死:[動] “上吊而死”首を吊って死ぬ。《金瓶》75: 到半夜尋一條繩子, 等我～了, 隨你和他過去。

[12] 拖(了):[動] 垂らす。《紅樓》101: 那狗抽頭回身, ~著個掃帚尾巴, 一氣跑上大土山上, 方站住了, 回身猶向鳳姐拱爪兒。

[13] 送命:[動] “断送生命”命を落とす。《儒林》34: 響馬來時, 只消小弟一張彈弓, 叫他來得去不得, 人人~, 一個不留。

[14] 自刎:[動] “自杀”自ら首をはねて死ぬ。《三國》14: 張飛聞言, 惶恐無地, 掣劍欲~。

[15] 血糊:[名] 血のり。

[16] 般:[助] “一样;似的”…のような。《水滸》38: 怎敵得李逵水牛~氣力, 直推將開去,

[17] 搭拉:[動] “耷拉;下垂的样子”だらりと垂れる。《西遊》39: ~兩個耳, 一尾掃帚長。

[18] 投崖:[動] “跳崖”崖から飛び降りる。《金瓶》57: 咦, 老檀越, 你若幹了這件功德, 就是那老瞿曇雪山修道, 迦葉尊散發鋪地, 二祖師~飼虎, 給孤老滿地黃金, 也比不得你功德哩。

[19] 拖拉:[動] 引きずる。《醒世》9: 老計道: 方纔你大奶奶穿着天藍大袖衫子, 頸子~着一根紅帶子, 已是到了我家了。

[20] 少七沒八:[成] 一つにまとまらないで分散しているさま。

[21] 骨拾:[名] “尸骨”白骨。《醒世》11: 若沒有傷, 我把那私窠子的~燒成灰撒了。

[22] 跳河:[動] 河に身を投げて自殺する。《官場》30: 沐恩常常聽見老一輩子的人講: 大凡~自盡的人, 一定是站在水裏的。

[23] 跳井:[動] 井戸に身を投げて自殺する。《紅樓》33: 賈政聽了, 驚疑問道: 好端端, 誰去~。

[24] 甕:[名] “一种盛东西的陶器, 腹部较大”かめ。陶製で深く腹部が大きなもの。《初刻》38: 員外道: 假如別人家~兒, 借將來家裏做酒。

[25] 行動:[動] “走动;行走”歩く。《二十》3: 就是~, 拜跪, 拱揖, 沒有壹樣不是礙眼的。

[26] …不得:[接尾] “用在动词后面, 表示不可以或不能够”(動詞の後ろにつけて)…してはいけない、…できない。《紅樓》62: 我們都去了使得, 你卻去~。

[27] 陰司:[名] “阴间;人死后灵魂所进入的地方”あの世、冥土。《西遊》37: 你~裡既沒本事告他, 卻來我陽世間作甚。

[28] 天日:[名] “太阳”太陽。《二刻》25: 鄭蕊珠在井中出來, 見了~, 方抖擻衣服, 略定得性。

[29] 除:[介] “不计算在内”除外する、…以外。《封神》27: ~此三件, 以下準行。

[30] 替代:[名][逆序] “代替”代わり。《恒言》33: 薛媪為去了女兒瓊瓊, 正想沒有個~, 見此女容貌美麗, 喜不可言, 慌忙將通身濕衣解下, 置於絮被之內, 自己將肉身偎貼。

[31] 方:[副] “才”やっと、漸く。《兒女》29: 公子一直送出二門~回。

[32] 與:[接] “还是”それとも。[比較] 肯定形と否定形の間に入る。[肯定形+與+否定形]。《金瓶》91: 及見玉樓, 便覺動心, 但無門可入, 未知嫁~不嫁, 從違如何。

[33] 若是:[接] “如果”もしも。《二十》5: ~要想那一個缺, 只要照開著的數目, 送到裏面去, 包你不到十天, 就可以掛牌。

[34] 整:[形] “表完全无缺”まるまるの、欠けることなく揃っている。《二刻》3: 酒罷送入洞房, 就是東邊小院桂娘的臥房, 乃前日偷眠妄想強進挨光的所在, 今日停眠~宿, 你道快活不快活。

[35] 何得:[連] “岂能;难能”どうして…することができよう。《儒林》29: 各位先生一時名宿, 小弟

正要請教，～如此倒説。

[36] 出世:[動] “托生; 转世” 転生する。《喻世》31: 將人犯逐一喚過，發出投胎～。

日本語訳

このような死に方をした魂は、人に生まれ変わることは許されず、常に亡霊になるのである。首吊りをした者は、命を落としたその一本の縄を垂らし、自刎した者は血糊のついた頭をだらりとさせ、崖から身投げした者はバラバラになった骨をひきずり、川や井戸に飛び込んだ者は甕カメのように大きな腹をしていて動けず、いつまでも冥途にいて陽の目を見ることができない。ただ、身代わりができて初めて生まれかわることが許されるのである。それもよい者に生まれ変わることができるか否かは分からない。もし、身代わりが見つからなければ、幾世も転生することはできない。

原文

却説^[1]那計氏^[2]雖是晁源棄舊憐新^[3]的，情^[4]也難忍^[5]，但^[6]人家^[7]的寡婦^[8]沒了漢子^[9]，難道都要死了不成^[10]。我也只當^[11]晁源死了守寡^[12]的一樣。大家^[13]寡婦，沒倚沒靠^[14]，沒柴沒米，都也還要苦守^[15]。計氏不少^[16]飯吃，不少衣穿，不久^[17]婆子^[18]回來^[19]又有得^[20]倚靠^[21]。

校注

[1] 却説:[副] “再说; 且说; 话说” さて、さて…を話しましょう。発話の言葉。話の場の転換に用いる。《兒女》2: ～一日忽然院上发下了一角公文，老爷拆开一看，原来是自己调署了高堰外河通判。

[2] (計) 氏:[名] 既婚女性の呼称。通常は実家の姓。《紅樓》11: 秦～聽了笑道: 這裏還不好，往那裏去呢。

[3] 棄舊憐新:[成] “抛弃旧宠，怜爱新欢” 古きを捨て新しきを好む。《金瓶》80: ～，見錢眼開，自然之理。

[4] 情:[名] 感情。《兒女》8: 凡是這等，我都要用他幾文，不但不領他的～，還不愁他不雙手有奉送。

[5] 難忍:[連] “难以忍受” 我慢できない。《老殘》17: 老殘一想，話也有理，只是因此就見死不救，於心實也～。

[6] 但:[副] “只; 仅” ただ。《紅樓》82: ～凡家庭之事，不是東風壓了西風，就是西風壓了東風。

[7] 人家:[名] “别人; 他人” 他人。《紅樓》50: 偏不巧，我正要做個媒呢，又已經許了～。

[8] 寡婦:[名] “丧夫的妇人” 未亡人、寡婦。《儒林》1: 只因你父親亡後，我一個～人家，只有出去的，沒有進來的。

[9] 漢子:[名] 夫。《金瓶》58: 偏你會那等輕狂百勢，大清早晨，刁蹬著～，請太醫看。

[10] 難道…不成:[連] “反诘语气” まさか…。[比較] 多く文末に“吗; 不成”を用いる。《儒林》1: 我雖年老，又無疾病，你自放心出去躲避些時不妨。你又不曾犯罪，～官府來拿你的母親去～。

[11] 只當…一樣:[連] “当成…一样” まったく…というものだ、あたかも…だ。《紅樓》36: 寶玉身旁坐下，因素昔與別的女孩子玩慣了的，～齡官也和別人～。

[12] 守寡:[動] “妇人于丈夫死后，没有改嫁” 夫の死後再婚しない、後家を通す。《二十》88: 唉，難為賢媳青年～。

[13] 大家=人家:[名] “别人; 他人” 他人。[比較] 字形類似からの錯字。《紅樓》50: 偏不巧，我正要做個媒呢，又已經許了～。

[14] 沒倚沒靠:[連] “孤苦伶仃，无所依靠” 頼りにする人がいない。

[15] 苦守：[連] 苦しい守り。《二刻》32：因不得自由，只得強留在彼，又不肯嫁人，如此～。

[16] 不少：[形] 多い。《紅樓》55：彼時來回話的～，都打聽他二人辦事如何。

[17] 不久：[副] “时间不长” すぐに、ほどなく。《老殘》1：～便到了登州，就在蓬萊閣下覓了兩間客房，大家住下。

[18] 婆ヒ：[名] 姑。《兒女》12：安太太又讓張姑娘，他此時見太太這等的溫和慈厚，心裏算早把這個～認定了，那裏肯先走。

[19] 回來：[動] 戻ってくる。《兒女》8：正說著，兩個驛夫～，又備說那褚壹官不能前來，請我今晚就在他家去住的話。

[20] 有得：[動][方]…することができる。《西遊》99：他那裏有住坐，又～吃，就教他家與我們漿漿衣服，卻不是好。

[21] 倚靠：[動] “依頼；凭恃” 頼る。《初刻》38：有一等做公子的，～著父兄勢力，張牙舞爪，詐害鄉民。

日本語訳

さて、計氏は、晁源の「旧きを遺棄し新しきを怜愛する」というやり方に、情として我慢することができないであろうけれども、どの家の寡婦も夫がいなくなったからと言って、それだけで死を求めるであろうか。計氏も晁源が死んで寡婦を通し続けようと思えば良かったのである。一般に寡婦は、頼りにする人がいなく、薪も米も無い状態で、女の節を守らなければならない。しかるに、計氏は食べる飯も欠かず、着る衣服も欠かず、やがて姑が帰って来れば姑に頼ることもできるのである。

原文

觀^[1]其^[2]有人回家，婆ヒ叫^[3]人寄銀子，寄金珠^[5]，寄首飾尺頭^[6]與^[7]你，可見^[7]又^[8]是疼愛^[9]媳婦的婆ヒ。就是^[10]小珍哥合^[11]晁源謗說^[12]你通姦^[13]和尚道士，要寫休書^[14]又^[15]被^[16]你嚷^[17]到街上，對了^[18]街鄰罵了个^[19]不亦樂乎^[20]，分晰^[21]得^[22]甚是^[23]明白，

校注

[1] 觀：[動] “看” 見る。《西遊》33：那長老在馬上～之，真個是寰中少有，世上全無。

[2] 其：[代] “这，那；她，他” この、その；彼、彼女。《水滸》55：宋江便與他把盞已了，自執～手，相請上山。

[3] 叫=叫：[動] “使；让” …に…させる。《金瓶》21：…這李瓶兒一面穿衣纏腳，～迎春開廂子，…。

[4] 金珠：[名] “金子做的珠子” 金の珠。《水滸》13：已使人將十萬貫收買～寶貝，送上京師慶壽。

[5] 尺頭：[名] “衣料；布匹” 反物、綿布類。《水滸》103：張世開嫌那段子顏色不好，～又短，花樣又是舊的。

[6] 與：[介] “給” …に。《水滸》2：牌頭～教頭王進說道：…

[7] 可見：[接] “可知” …から…が分かる。《金瓶》34：西門慶更不問這噴飯是那里？～平日家中受用，…。

[8] 又：[接] “还，而且” その上、そして。《金瓶》1：知縣見他仁德忠厚，～是一條好漢，有心要抬舉他。

[9] 疼愛：[動] “关心爱护” かわいがる。《紅樓》3：…他與別人不同，自幼因老太太～，原係同姊妹們一處嬌養慣了的。

[10] 就是：[接] “即使” たとえ…でも。《儒林》50：～已革生員，怎麼拖到總兵的參案裏去。

[11] 合：[助] “同” …と。《紅樓》54：這可全了，蓉兒就～你媳婦坐在一處，倒也團圓了。

[12] 謗説:[動] “诽谤” 誹謗する、他人の悪口を言う。《醒世》69: 止我不知叫他數説了多少, 聲聲口口的~我不賢良, …。

[13] 通姦:[動] “違反道德法律的男女交往” 姦通する。《水滸》26: 告説: 小人親兄武大, 被西門慶與嫂~, 下毒藥謀殺性命。

[14] 休書:[名] “休弃妻子的文书” 離縁状。《水滸》8: 今日就高鄰在此, 明白立紙~, 任從改嫁, 並無爭執。

[15] 又:[副] “表示转折, 可是” …が、しかし。《水滸》6: …待要回去, 又敵他不過。

[16] 被:[介] “表示被动” …に…される。《水滸》2: …員外兒子使錢, 每日三瓦兩舍, 風花雪月, ~他父親開封府裏告了一紙文狀。

[17] 嚷:[動] “吵闹” 喧嘩する。《金瓶》92: …交還了許多床帳粧奩箱籠家火。三日一場~, 五日一場鬧…。

[18] 對了:[連] “对着” …に対して。《儒林》22: 牛浦偷眼在板縫裏張那人時, ~蠟燭, …

[19] 个:[連] “用在动词与补语间, 表状态程度” 動詞の後で、程度を導く; …ほど。《金瓶》8: 不想都被這秃廝聽~不亦樂乎。

[20] 不亦樂乎:[成] “非常; 极度” 甚だしい、てんやわんやである。《金瓶》61: 這裡兩個一動一靜, 都被這胡秀聽了個~。

[21] 分晰:[動] “说明; 辯白” 説明する、弁明する。[比較] 現代語ではこの意味で用いない。《紅樓》78: …自己遂低頭想了一想, 便命人請了寶釵來~前日的事以解他疑心…。

[22] 得:[助] “表示动作结果或程度”。《紅樓》11: 一句話說~滿屋裏的人都笑起來了。

[23] 甚是:[副] “很; 极” とても、非常に。[比較] “是” 是副词语尾。《金瓶》12: 大娘倒見我~親熱, 又那兩箇與我許多花翠衣服。

日本語訳

さらに、晁夫人は使用人が家へ帰る時、お金、金の珠、飾りもの、反物をこちらへ届けさせた。これらからみれば、晁夫人がお嫁さんをおかわいがる姑であることは分かる。小珍哥と晁源は、計氏が僧侶や道士などと姦通があると言いがかりをつけて、離縁状を書こうとするが、計氏に通りまで騒がれて行かれた。計氏は隣人たちに対して聞こえるように、どちらが悪いかをはっきりさせるべく、晁源らを存分に罵った。

原文

人七都^[1]曉得^[2]是珍哥的狡計^[3], 个七都説晁源的薄情^[4]; 就是^[5]晁源也^[5]自知理虧^[6], 躲^[7]在門後邊像^[8]縮頭的死鯨^[9]一般^[8]; 那珍哥也軟做^[10]一塊^[11]; 頂^[12]得門鉄桶一般^[13]; 也就^[14]可以不死。只箇^[15]要^[16]那珍哥償命^[17], 不顧^[18]了^[19]先自^[20]輕生^[21]。

校注

[1] 都:[副] “全部” 全て、皆。《水滸》2: 人~喚他做小王都太尉, 便喜歡這樣的人。

[2] 曉得:[動] “明白; 知道” 分かる、知る。《水滸》106: 段二本是箇村鹵漢, 那~甚麼兵機。

[3] 狡計:[名] “奸计; 阴谋” 企み。《水滸》107: 吳用道: 賊人必有~。魯智深等已是深入重地, …。

[4] 薄情:[名] “负心; 对感情不忠贞” 薄情である、つれないこと。《金瓶》55: 我仔細想來, 你恁地~, 便去著, 也索罷休。

- [5] 就是…也…:[連] “即使…也…，表示让步”たとえ…でも。《儒林》3：我聽見人說，～中相公時，～不是你的文章，…。
- [6] 理虧:[連] “不占理；沒有道理”筋が通らない。《金瓶》12：那婦人自知～，不敢不跪。
- [7] 躲:[動] “藏；躲避”隠れる、避ける。《水滸》4:…只得捻腳捻手，把拴拽了，飛也似閃入房裏～了。
- [8] 像…一般:[連] まるで…のようだ。《水滸》61：眾人道：這個道童的鳥眼，恰～賊～看人。
- [9] 縮頭的死驚:[連] “表示害怕胆小”首を引っ込め死んだふりをするすっぽん、臆病者の比喩。
- [10] 軟做:[動] “癱軟”ぐにゃぐにゃになっている、支える骨がなく体が動けない。[比較] “軟”は一般に形容詞である。《水滸》16：楊志口裏只是叫苦，～了身體，扎掙不起。
- [11] 一塊:[名] 一塊（一つの塊り）。[比較] ここは數量詞ではない。力がないから、体が一つの肉の塊ようになった。《金瓶》8：…都七顛八倒，酥成～。
- [12] 頂:[動] “抵住；撐住”支える、突っ張る。《紅樓》60：…葵官豆官前後頭～住。
- [13] 一般:[形] “一樣”…のようだ、…らしい。[比較] 常に“像…一般”“如…一般”の形で比喩を表す。《儒林》55：那柴燒的一塊一塊的，結成就和太湖石～，光怪陸離。
- [14] 也就:[連] “以前句为条件，于是”すると，それで。《紅樓》4：馮家得了許多燒埋銀子，～無甚話說了。
- [15] 只圖(圖):[連] “只顧；只想”ひたすら…するばかり。《金瓶》86：我不圖打魚，～混水耍子。
- [16] 要:[動] “索要；索取”もらう、…がほしい。《西遊》38:…莫說寶貝，憑你～甚麼東西都有。
- [17] 償命:[動] “抵命”命で償う。《儒林》4：…揪他出來，一頓打死，派出一個人來～。
- [18] 不顧:[連] “不管；不理”…を構わずに。《西遊》49：一莊老幼男女，都向河邊，也～泥水，都跪在裏面，磕頭禮拜。
- [19] 了:[助] “接在两个动作间表示连接”…て。《水滸》17：漸漸天色明亮，只得趕早涼～行。
- [20] 先自:[副] “首先；先”後先、まず。《水滸》7：林沖扳將過來，卻認得是本管高衙內，～手軟了。
- [21] 輕生:[動] “自杀”自殺する。《警世》28：許宣正欲跳水，只聽得背後有人叫道：男子漢何故～。

日本語訳

皆は珍哥の陰謀が分かっている、晁源は薄情だと言った。その晁源ですら、自分が悪いと知っていたので、首を引っ込め死んだふりをしたスッポンのように臆病にも扉の後ろにじっと隠れていた。珍哥も支える骨が抜けたように小さくなって動けず、隙間がない鉄の桶のように扉を必死に支え押さえていた。それにしても、計氏は死ななくてもよかったであろうに。計氏はただひたすら珍哥の命で償ってもらおうと思ひ、後先何も考えずに自殺してしまったのだ。

原文

若不是^[1]遇見^[2]了^[3]李僉憲、褚四府這樣執法^[4]的好官，单^[5]即^[6]靠^[7]了武城縣那個長^[8]搭背瘡^[9]的胡大爺^[10]，不惟^[11]你這命没人償你的，還^[12]幾乎^[13]弄^[14]一頓^[15]板子^[16]放在^[17]你爺ヒ哥ヒ的臀上。

校注

- [1] 若不是:[連] “表假设，要不是”もし…でなければ。《西遊》4:…～此官，還要打上靈霄寶殿也。
- [2] 遇見:[動] “碰見；遇到”出会う、遭う。《水滸》36：～李立，說將起來。
- [3] 了:[助] “動作状态的完了”《儒林》1：雖然如此說，元朝末年，也曾出～一個嶽崎磊落的人。
- [4] 執法:[形] “拘泥于法令，成規；这里指执法公正”法などを重視する人、公正である。《西遊》4：

…我家也招得一個。你怎麼這般～。

[5] 単:[副] “单单; 仅仅” ただ。《金瓶》63: 平安逐日與四名排軍, ～管人來打雲板, 捧香紙。

[6] 卽:[接] “假如” もし…であれば。《金史》94: 古來一城一邑, 尚有賞賚, ～欲拜三公, 三公非賞功官, 如左丞相亦非賞功者, 雖可特授之。

[7] 靠:[動] “依靠; 凭借” 頼る。《金瓶》20: 常言道: 有兒～兒, 無兒～婿。

[8] 長:[動] “生” できる。《儒林》53: 後來～了鬍子, 做不得生意。

[9] 搭背瘡:[名] “长在背上毒疮” 背にできたひどい瘡。

[10] 大爺:[名] “对县官的尊称” 県知事への尊敬語。《醒世》46: …因合族人争産, 前任徐～親到他家, 叫了我來診脈…。

[11] 不惟:[接] “不仅; 不只” …のみではなく、…だけではなく。《水滸》24: ～做得好針線, 諸子百家皆通。

[12] 還:[副] “进而; 而且” その上、更に。《紅樓》41: 我們成日家和樹林子作街坊, 困了枕著他睡, 乏了靠著他坐, 荒年間餓了～吃他, …。

[13] 幾乎:[副] “差点” 危うく、殆ど。《儒林》8: …臨終也不能一別, 同三兄悲痛過深, ～發了狂疾。

[14] 弄:[動] “导致; 致使” 招く、引き起こす。《儒林》1: 況你的性情高傲, 倘若～出禍來, 反為不美。

[15] 頓:[量] “表示动作的回数” 回。[比較] “頓” は主に食事、忠告、罵詈、叱責などの回数を表す。《紅樓》25: …免不得那賈母又把跟從的人罵一～。

[16] 板子:[名] “指用以惩罚的木板或竹板, 这里指代惩罚” 懲罰用の板。《儒林》22: …拿帖子送到蕪湖縣, 先打一頓～。

[17] 放在:[動] “放置, 这里指打” 置く。《金瓶》8: …見一頂新纓子瓦楞帽, 替他～桌上。

日本語訳

もし李僉憲、褚四府のような公正で良い官吏に出会わなければ、ただ武城縣の腫れ物ができた胡県知事だけでは、命で償う人を見つけ出せないだけではなく、その上、自分の父と兄が危うく責打されてしまうところだった。

原文

珍哥雖然^[1] 說是問^[2] 了抵償^[3], 他還好七的^[4] 在監^[5] 裏快活^[6], 沒見^[7] 有甚^[8] 難為^[9] 他。只是計氏在那陰司中悠七蕩七^[10], 不得^[11] 托生。若是^[12] 有晁源的時候, 他還放僻邪侈^[13], 作孽非為^[14]。有了這等^[15] 主人^[16], 自然^[17] 就有這等的一般^[18] 輔佐^[19]。

校注

[1] 雖然:[接] (…だ) けれども。《水滸》9: ～目下暫時受苦, 久後必然發跡。

[2] 問:[動] “审讯; 引申为判決” 裁きを下す、罰する。《水滸》64: 鄆城小吏宋江, 到此謹參, 將軍～罪。

[3] 抵償:[動] “以价值相等的事物赔偿或补偿” 償いをする。《醒世》13: 珍哥問了～, 方知道那鍋是鐵鑄成的, 扯了晁大舍號陶痛哭。

[4] 好七的:[形] “形容情况正常; 完好” よい、適當である。《初拍》12: 只見王郎～在家裡。

[5] 監:[名] “监狱” 牢、牢獄。《紅樓》104: 前兒～裏收下了好幾個賈家的家人。

[6] 快活:[形] “高兴; 快乐” 楽しい、快活である。《水滸》17: 閑常有酒有食, 只和別人～。

[7] 見:[動] “看到” 見る、見かける。《水滸》3: 上街行得三五十步, 只～一簇眾人, 圍住白地上。

- [8] 甚:[代] “什么；啥”何。《金瓶》18: 看見李瓶兒門首開個大生藥舖，～堆著許多生熟藥材。
- [9] 難爲:[動] “使人为难”（人）困らせる。《紅樓》116: 侍者不必多疑，我非晴雯，我是奉妃子之命特來請你一會，並不～你。
- [10] 悠七蕩七:[形] “悬空摆动状” 空中に揺れ動く、ゆらゆらと彷徨う。《紅樓》5: 猶似秦氏在前，遂～，跟著秦氏到了一處所在。
- [11] 不得:[副] “不能” …できない。《清平》: 不是王春春交我走歸，幾乎～相見。
- [12] 若是:[接] “如果” もしも…ならば。《金瓶》25: 早是奴沒生下兒長下女，～生下兒長下女，教賊奴才揚條著好聽。
- [13] 放僻邪侈:[成] 勝手な振る舞いをし、どんな悪事でも平気でやる。《醒世》66: 這狄希陳若從此自己拿出那做男子的體段，不要在他面前～，却不也就漸次收了他的野心。
- [14] 作孽非爲:[連] “做不顾法纪或礼法的坏事” 道にもとる罪つくりなことをする。
- [15] 這等:[代] “这样” このよう。《水滸》53: ～人只可驅除了罷，休帶回去。
- [16] 主人:[名] “仆婢及受雇傭者的家主”（下僕の）ご主人。《紅樓》4: 被毆死者乃小人之～。
- [17] 自然:[動] “当然” 当然である。《水滸》41: 那人也是一座地煞星之數，～義氣相投。
- [18] 一般:[形] “同样” 同じである。《水滸》3: 你是個賣肉的操刀屠戶，狗～的人，也叫做鎮關西。
- [19] 輔佐:[動] “辅助佐理” 補佐する。《金瓶》1: 我欲廢太子，況彼四人～，羽翼已成，卒難搖動矣。

日本語訳

珍哥は命の償い、つまり死刑判決を受けたとはいえ、監獄で快適に過ごしており、彼女を困らせることは何もなかった。ところが、計氏の方は冥土でゆらゆらと彷徨い、生まれ変わることができないでいる。一方、晁源は生前、勝手な振る舞いをし、平気で悪事をやり、道にもとる罪つくりなことをした。このような主人には、当然それと同じような召使いがいて主人の悪事を補佐するわけである。

原文

既是^[1]有了如此^[2]的主僕^[3]，自然家堂^[4]香火^[5]都換^[6]了凶神^[7]，變^[8]成乘氣^[9]，生出^[10]異事^[11]。你那鬼^[12]在家裏，便好倚草附木^[13]，作浪興波^[14]，使他做个替身^[15]，即^[16]好托生去了。如今^[17]却是這等一个有道理^[18]、有正經^[19]、有仁義^[20]的一位晁夫人當^[21]了家事^[22]。

校注

- [1] 既是:[接] “既然” …する以上。《三國》79: 汝～真心，便可去襄陽取劉封首級來，孤方准信。
- [2] 如此:[代] “这样” こうのようである。《水滸》44: ～豪傑，留落在此賣柴，怎能勾發跡。
- [3] 主僕:[名] “主人与仆人” 主従。《警世》35: 邵氏與得貴姦情是的，～之分已廢。
- [4] 家堂:[名] “祠堂” 一族の祖先の靈を祭る堂、御靈屋、家廟。《醒世》3: 隨先使家人到～內燒紙謝罪，許願心。
- [5] 香火:[名] “燃着的香” 燃えている線香。《紅樓》177: 如今～一炷也沒有，那裏有磚灰人工來打牆。
- [6] 換:[動] “替换”（…を・に）換える。《水滸》13: 解了鎗刀弓箭，卸了頭盔衣甲，～了衣裳。
- [7] 凶神:[名] “凶恶害人的鬼神” 凶悪な神、凶魔。《金瓶》11: ～也一般。
- [8] 變:[動] “改变” かわる、かえる。《西遊》25: 那大仙按落雲頭，搖身一～，～作個行全真。
- [9] 乘氣:[名] “不祥之气” 邪氣。= “乖气”。《醒世》32: 人間的～上升，天上的沴氣下降。
- [10] 生出:[動] “发生” 起こる。《平妖》38: 真是個：畢竟唱甚曲兒，～甚事端，且聽下回分解。

- [11] 異事:[名] “奇怪的事” 変わった事。《紅樓》2: 再說榮府你聽, 方才所說~, 就出在這裏。
- [12] 鬼:[名] “人死后不灭的魂灵” 靈、靈魂。《水滸》34: 秦明生是大宋人, 死為大宋~。
- [13] 倚草附木:[成] “精灵倚托草木等物而成妖作怪” 靈が草に依り木に付き妖怪化する。《西遊》40: 这去处凶多吉少, 你知道那~之说, 是物可以成精。
- [14] 作浪興波:[成] “兴风作浪” 騒動を起こす。《醒世》85: 且又怕呂祥來到, ~, 那時要去不能。
- [15] 替身:[名] “替代別人的人” 身代わり。《儒林》19: 考期在即, 要尋一個~。
- [16] 即:[副] “便; 就” ある条件の下である結果になることを表す。推量の語気を含む。《紅樓》5: 今夕良時, ~可成姻。
- [17] 如今:[名] “现在” 今現在。《儒林》15: ~世上人, 那個頂著房屋走徂。
- [18] 有道理:[連] “懂规矩; 讲道理” 道理がわかる。《紅樓》17: 好姐姐們, 且站一站, 我~。
- [19] 有正經:[連] “正派” まっとうである。《初刻》6: 卻又資性貞淑, 言笑不苟, 極是一個~的婦人。
- [20] 有仁義:[連] “充满仁爱和正义” 仁愛と正義に厚い。《異域》19: 我若徒手迎回, 非公等平日~, 順天道, 何以能然。
- [21] 當:[動] “主持; 执掌” (家事・權力などを) 切り盛りする。《紅樓》31: 明日你自己~家立事, 難道也是這麼顧前不顧後的。
- [22] 家事:[名] “家庭事务” 家事。《紅樓》102: 將來這一番~, 都是你的擔子。

日本語訳

このような主従のいる家では、御靈屋で供えた蠟燭も線香も自ずと悪神に変わり、邪気が発生し、異変が起こるものである。その計氏の靈も自宅の庭で草に依り、木に付き、風波を起こして身代わりの人を作れば、生まれ変わることができたかもしれない。しかし、今は非常に道理が分かり、まっとうで、仁義に厚い晁夫人が家計を切り盛りしているのである。

原文

小主人^[1]雖是个孩子^[2], 又是一个高僧^[3]轉世^[4]。當初^[5]那些投充^[6]的狐羣狗党^[7], 有見沒了雄勢^[8], 自己辭^[9]了去的; 有拐^[10]了房錢^[11]租錢^[12], 逃走^[13]了的;

校注

- [1] 小主人:[名] “年幼的主人” 幼い主人。《紅樓》4: 無奈薛家原系金陵一霸, 倚財仗勢, 眾豪奴將我~竟打死了。
- [2] 孩子:[名] “小孩; 儿童” 子供。《金瓶》7: 與我些包了家去, 稍與~吃。
- [3] 高僧:[名] “精通佛理、道行高深的和尚” 高僧、位の高い僧。尊敬にも用いる。《西遊》12: 臣瑀等, 蒙聖旨, 選得~一名陳玄奘。
- [4] 轉世:[動] “灵魂依照因果报应而投胎, 成为另一个人” 輪廻転生する。《儒林》24: 況既說父親~, 不該又賣錢用。
- [5] 當初:[名] “起初; 过去” 当時、かつて。《金瓶》93: 想著~你府上那樣根基人家。
- [6] 投充:[動] “投往充当” (他人を) 頼ってゆく、身を寄せる。《水滸》80: 原來八箇頭領, 來~水軍。
- [7] 狐羣狗党:[成] “比喻勾结在一起为非作歹的坏人” ろくでもない者の集まり、悪党ども。《三國》12: 時賊兵雖眾, 都是~, 並無隊伍行列。
- [8] 雄勢:[名] “雄厚的势力” 強大な勢力。《醒世》10: 那時這麼個~, 甚麼小珍哥呢, 就是小假哥也

躲了。

[9] 辭：[動] “告別；告辭” 別れを告げる。《水滸》31: 武松～了出門，插起雙袖，搖擺著便行。

[10] 拐：[動] “拐騙” 騙し取る、持ち逃げする。《醒世》98: 呂祥得空子～着行李合驛跑了。

[11] 房錢：[名] “租房的钱” 家賃。《醒世》51: 晁鳳，你要～去，湊二兩銀子，你去送給他，叫他拿着來回盤纏。

[12] 租錢：[名] “地租；佃租” 小作料。《儒林》33: 這房子每月要八兩銀子的～。

[13] 逃走：[動] “逃跑” 逃げる、逃げ出す。《清平》：不如共你～了吧。

日本語訳

幼い主人（晁梁）はまだ子どもであるが、実は高僧の生まれ変わりでもある。また、以前頼ってきた悪党どもの召使い達は、晁家が勢力を失ったと思って自ら去って行った者、家賃や小作料を持ち逃げした者が出て、今では家にいない。

原文

又有如^[1]高升、曲進才、董重吃醉^[2]打^[3]了秀才逐出去^[4]的，也有晁夫人好^[5]打發^[5]回家的，剩下^[6]的幾外^[7]都是奉公守法^[8]的人。幾個^[9]養娘^[10]都是晁夫人着己^[11]的親隨^[12]。春鶯，晁夫人看^[13]他就^[14]如自己親生^[15]女子^[16]。那裏^[17]有个與你做替身^[18]的。

校注

[1] 如：[動] “举例” 例えば。《醒世》28: 單且只說讀書的學校中，～那虞際唐、尼集孔、祁伯常、張報國、吳湖流、陳驊這班禽獸，個個都傷敗彝倫起來。

[2] 吃醉：[動] “饮酒过量，神志不清” 酒に酔う。[比較] 方言は“水；茶；酒”等のほか、たばこなども“吃”を用いる。《水滸》38: 在江州牢裏，但～了時，卻不奈何罪人。

[3] 打：[動] “攻击” 打つ、殴る。《西遊》8: 在蟠桃會上，失手打碎了玻璃盞，玉帝把我～了八百，貶下界來，變得這般模樣。

[4] 逐出去：[動][書] “赶出去；驱逐出去” 追い払う、追い出す。《平妖》17: 縣令大怒，將庫吏責打二十板革出，道士～廟門，不許容留。

[5] 打發：[動] “使离去” あしらう、計らう。《醒世》86: 已是離了家裏，方說憑已換出，算計～呂祥回家。

[6] 剩下：[動] “剩餘” 残る、残す。《金瓶》62: 爹說教娘每剪各房裡手帕，～的與娘每做裙子。

[7] 幾外：[代] “几个” 二個以上の不定の数を表す。

[8] 奉公守法：[成] “奉行公事，遵守法令” 公務を重んじ法を守る。《醒世》27: 這百年之内，在上的有那秉禮尚義的君子，在下又有那～的小人。

[9] 養娘：[名] “婢女” 若くて未婚の侍女。

[10] 養娘：[名] “女仆” 小間使い。[比較] “養娘” との差は、“養娘”の方が一般的に少し年上の女性を指す。《儒林》11: 當晚，～走進房來看小姐，只見愁眉淚眼，長吁短歎。

[11] 着己：[形] “亲近；贴心” 親しい、親密である。《醒世》85: 我跟前又沒個～的人，有人都是他一條腿的。

[12] 親隨：[名] “亲信，随从” 親近のもの、側近。《紅樓》23: 四個丫頭，除各人奶娘～養娘不算外，另有專管收拾打掃的。

[13] 看：[動] “认为” (…と) 考える、(…と) 思う。《西遊》97: 母親既然～得明白，必定是了。

[14] 就:[副] まさに、ほかでもなく。《西遊》12: 送出朝門, 教他上大街行道, 往寺裏去, ~如中狀元誇官的一般。

[15] 親生:[形] “自己生育的” 自分で産んだ。《紅樓》79: 如今太爺也沒了, 只有老奶奶帶著一個~的姑娘過活, 也並沒有哥兒兄弟, 可惜他竟一門盡絕了。

[16] 女子:[名] “女儿” 娘。

[17] 那裏:[代][白] “哪里” 反語。《金瓶》62: 你病的久了, 下邊流的你這神虛氣弱了, ~有甚麼邪魔魍魎, 家親外崇。

[18] 替身:[名] “代替受罪的人” 身代わり。《醒世》62: 只這個女人的~, 這却那裏去尋。

日本語訳

また例えば高升、曲進才、董重のように酒に酔い秀才を殴って追い出されたものもいたし、晁夫人が手厚く実家に帰したのもいた。残った数人の下男はすべてきちんと決まりを守る者だった。それに、何人かの下女、小間使いは皆晁夫人の側近だった。春鶯については、自分の実の娘のように接していた。こうした状況では、計氏の身代わりになる者は誰もいる筈がない。

原文

況且^[1] 家宅^[2] 六神^[3] 都換^[4] 了一班^[5] 吉星善曜^[6], 守護^[7] 得家中鉄桶^[8] 一般, 這計氏^[9] 的陰靈^[9], 可憐^[10] 何日^[11] 是出頭^[12] 的日子^[13]。想是^[14] 別^[15] 再^[16] 沒有方法, 只得^[17] 托夢^[18] 與那婆^[18] 匕, 成^[19] 廣^[20] 做道場^[21], 仗^[22] 佛超度^[23]。

校注

[1] 況且:[接] その上、それに。一步突っ込んで理由を述べたり、新しい理由を追加、補充したりする。
[比較] 多く“況且…也…; 況且…都…”の形をとる。《平妖》27: ~他那死鬼老子也不知是累了我家多少。

[2] 家宅:[名] “家庭住宅” 家宅、屋敷。《醒世》91: 鎮日爭鋒打鬧, 攪亂得~不安, 四鄰叫苦。

[3] 六神:[名] 魔除けとして門の扉の上に張る家宅を守る神の画像。“灶王爷、土地神、门神、户尉、井泉童子、三姑夫人”を指す。《醒世》68: 那時狄家還該興旺的時節, 家宅~都是保護的, 有這樣的怪物進門, 自然驚動家堂。

[4] 換:[動] “更換”(…を・に) 換える。《水滸》53: 又將熱水來與他洗浴了, ~些乾淨衣裳。

[5] 班:[量] 集団を数える。《西遊》29: 自十三年前, 不見了公主, 兩~文武官, 也不知貶退了多少。

[6] 吉星善曜:[連] “象征幸运的神” 幸運をもたらす星(神様)。

[7] 守護:[動] “保护” 守護する、保護する。《西遊》15: 行者吩咐山神、土地~師父, 日值功曹去尋齋供。

[8] 鉄桶:[名] “比喻坚固严密” 全然隙間がない。《金瓶》93: 走投無命, 奔到家, 把大門關閉, 如~相似, 就是樊噲也撞不開。

[9] 陰靈:[名] “人死后的灵魂” 亡霊、人の死後の靈魂。《紅樓》68: 你死了的娘~也不容你, 祖宗也不容, 還敢來勸我。

[10] 可憐:[形] “值得怜悯” 哀れである、可哀想である。《紅樓》57: 也怨不得他傷心, ~沒父母, 到底沒個親人。

[11] 何日:[代][書] “哪一天” いつの日(か)。《西遊》7: 惡貫滿盈今有報, 不知~得翻身。

[12] 出頭:[動] “从困境中解脱” 苦境から抜け出す、浮かばれる。《紅樓》109: 二姑娘這樣一個人,

為什麼命裏遭著這樣的人，一輩子不能～。

[13] 日子：[名] “日期” 日にち。《金瓶》3：娘子家裡有曆日，借與老身看一看，要個裁衣的～。

[14] 想是：[副] “恐怕” 思うに、おそらく。[比較] 下に推量の表現を伴って、かなり確実な推量判断を導く。《水滸》1：這小的如何盡知此事，～天師分付他。

[15] 別：[形] “另外的” ほかの、別に。[比較] 不完全形容詞。《醒世》27：只見麻從吾領了自己妻子，三個來到家中，除了三個光身，也～再沒有行李。

[16] 再：[副] これ以上。

[17] 只得：[副] “不得不” やむなく、(…する) しかない。《水滸》2：高俅無計奈何，～來淮西臨淮州，投奔一個開賭坊的閑漢。

[18] 托夢：[動] “托梦” 夢で知らせる。親しいものの靈魂が夢に現れて言付けをする。《水滸》26：你若屈銜冤，被人害了，～與我兄弟，替你做主報仇。

[19] 成：[動] “求；恳求” 懇請する。お願いする。

[20] 廣：[形] “众多；数量很多” 多い。《金瓶》29：奸門紅紫，一生～得妻財。

[21] 做法場 [連] “做法事” 法事を行う。《水滸》60：來到濟寧，經過梁山泊，就請在寨內～。

[22] 仗 [動] “依靠；依赖” 頼る、依頼する。《紅樓》62：我來了，全～列位扶持。

[23] 超度：[動] “诵经使鬼魂脱离苦难” 仏に頼って済度してもらう。《儒林》33：拿銀子做了幾天佛事，～婁太爺生天。

日本語訳

それに家宅を守る六神がすべて吉兆善星の姿に変わり、邪気が家に入らないように一分の隙もなく守っていた。可哀想に計氏の亡霊は、いつになれば、その苦境から抜け出すことができるのだろうか。思うに他には方法がない。姑である晁夫人の夢の中に現れて、広く法事を行ってもらい、仏に頼って済度されることを求めるしかなかった。

原文

一夜^[1]，晁夫人睡去^[2]，夢見^[3]計氏穿^[4]了天藍^[5]段^[6]大袖^[7]衫子^[8]，白羅地^[9]洒線^[10]連裙^[11]，光頭^[12]淨面^[13]，只是^[14]項上^[15]拖^[16]了一根^[17]紅帶^[18]，望^[19]着晁夫人四雙八拜^[20]，說他想家^[21]得^[22]緊^[23]，要晁夫人送他回去。

校注

[1] 一夜：[名] “一天夜里” ある夜、ある晩。《儒林》16：～夢見你掉在水裏，我哭醒來。

[2] 睡去：[動] “就寝” 寝る、就寝する。《西遊》5：一時拿住，怎生是好，不如早回府中～也。

[3] 夢見：[動] “在梦中看见” 夢に見る。《金瓶》62：不想剛睡就做了一夢，～哥使大官兒來請我，說家裡吃慶官酒。

[4] 穿：[動] 着る、穿く。《儒林》38：見那樹上吊的是個女人，披散了頭髮，身上～了一件紅衫子。

[5] 天藍：[名] “晴朗天空的颜色” 空色。《醒世》8：只見計氏蓬鬆了頭，上穿着一件舊～紗衫，裏邊襯了一件小黃生絹衫。

[6] 段：[名] “綢緞” 緞子。

[7] 大袖：[名] “寬大的袖子” 衣服の大きな袖。《醒世》9：方纔你大奶奶穿着天藍～衫子，頼子拖着一根紅帶子，已是到了我家了。

[8] 衫子:[名] “妇人穿的上衣” 婦人服。“半衣”ともいう。《醒世》59: 也不消穿大袖~, 尋出那月白合天藍冰紗小袖衫子來。

[9] 白羅地:[名] “白色的棉布” 白い薄絹。

[10] 洒線:[名][書] “洒花; 刺繡” 刺繡。《儒林》42: 頭戴恩廕巾, 一個穿大紅~直裰, 一個穿藕合洒線直裰。

[11] 連裙:[名] “通裙; 连衣裙” ワンピース。《醒世》37: 內中正有那個穿蜜合羅衫的閨女, 換了一件翠藍小衫, 白紗~。

[12] 光頭:[連] 櫛をきれいに入れる。

[13] 淨面:[動][白] “洗脸” 洗面する、顔を洗う。ここでは「清潔な顔」を表す。[比較] 亡霊は一般に髪は乱れ恐ろしい顔をしているが、“光頭淨面”はそれと正反対の姿を表している。《金瓶》93: 到次日清晨, 小童盥水~, 梳洗盥漱畢。

[14] 只是:[副] “仅仅是” ただ。[比較] ある状況・範囲あるいは動作・行為にのみ限られていることを強調する。《西遊》12: 那相良兩口兒~朝天禮拜, 那裏敢受。

[15] 項上:[名] “脖颈上” 項に。《紅樓》3: ~帶著赤金盤螭珞圈。

[16] 拖:[動] “佩带; 悬挂”(体の後ろに) ぶら下げる。《醒世》83: 莫說別的, 你只穿着錦繡, 夾着鞍籠, ~牙牌總子, 逐日的合這夥子拜往赴席。

[17] 根:[量] 細長いものを数える。《西遊》4: 悟空手疾眼快, 正在那混亂之時, 他拔下一~毫毛。

[18] 紅帶:[名] “红色丝带” 赤い帯。《醒世》16: 又常常見計氏頸子裏拖了根~, 與晁源相打。

[19] 望:[介] “向”(…に) 向かって。《紅樓》21: 賈璉在鳳姐身後, 只~着平兒殺雞抹脖使眼色兒。

[20] 四雙八拜:[連] “四起八拜” 婚礼などで行う正式な礼儀作法。

[21] 想家:[動] “想念家人; 想要回家” 家が恋しい、里心が付く。《醒世》77: 與相進士相聚, 甚是快活, 倒也絕無~之心, 只有得離素姐為幸。

[22] 得:[助] 動詞・形容詞の後に付いて、その状態(程度・結果)の説明を後に導く。《水滸》31: 脫了身上舊衣裳, 把那兩件新衣穿了, 拴縛~緊鞵。

[23] 緊:[副] とても、非常に。《金瓶》8: 婦人盼他急得~, 只見婆子回了婦人, 婦人又打罵小女兒街上去尋覓。

日本語訳

ある夜、晁夫人が眠ると、夢に計氏が現れ、空色の緞子の大きな袖のついた上着と白い薄絹の連裙を着て、髪も梳き綺麗な顔で、ただ首に赤い帯を着けているだけで、晁夫人に向かって丁重に挨拶した。そして、「家が恋しい」と言って、晁夫人に自分を家まで送り戻してくれるよう頼んだ。

原文

晁夫人醒來^[1], 也只當^[2]是尋常^[3]的夜夢^[4], 丟過^[5]一邊^[6]。過^[7]了幾日^[8], 又夢見計氏還穿了那套^[9]衣裳^[10], 說他十二年不得家去^[11], 又等不出^[12]替身, 明說^[13]叫晁夫人與他超度。

校注

[1] 醒來:[動] “醒来” 目が醒める、目覚める。《水滸》36: 那大漢扶住著, 漸漸~。

[2] 只當:[動] “当成; 假装”(てつきり…と) 思い込む。(…と) する。《金瓶》26: ~暗中了人的拖刀之計。

- [3] 尋常:[形] “平常;普通” 普通・平常である。《水滸》57: 這兩個武藝不比~, 不是綠林中手段。
- [4] 夜夢:[名] “晚上做的夢” 夜の夢。《醒世》20: 奶奶~甚兇, 叫大官人快快收拾進城。
- [5] 丟過:[動] “放;擱” 放って置く、置いておく。《醒世》2: 把那聽見的話, 也只當耳邊風, ~一邊去了。
- [6] 一邊:[名] “旁边;一边” 一方、(…の) 側。《醒世》10: 若官看了嫌少, 把那丟在~。
- [7] 過:[動] “经历;经过(時間)” (時間) が過ぎる。《水滸》2: 自史太公死後, 又早~了三四個月日。
- [8] 幾日:[連] “几天” 何日、数日。《儒林》8: 真乃是慌不擇路, 趕了~早路, 又搭船走。
- [9] 套:[量] “用于搭配成组的事物” 同類の物が一緒になっている一組。《紅樓》45: 你喜歡這個, 我也弄一~來送你。
- [10] 衣裳:[名] “衣服” 衣服、衣装。《儒林》22: 忙叫小廝氈包裹拿出一件~來與他換了, 先送他回下處。
- [11] 家去:[動] “回家;回去” 家へ帰る。[比較] 現代語では方言。蘇北方言では“去家”とも言う。《水滸》24: 我且不做買賣, 一同和你~。
- [12] 等不出:[連] “等不到” 待っても代わり身が出現しない。
- [13] 明說:[動] “直截了当地說” はっきり言う、明言する。《紅樓》9: 有話不~, 許你們這樣鬼鬼崇崇的幹什麼故事。

日本語訳

晁夫人は目覚めたが、いつもの夢かと思い、放って置いた。数日が過ぎ、計氏が再びあの衣装を着て夢に現れた。計氏は自分が十二年もの間家へ帰ることができていないうえに、身代わりをいくら待っていてもなかなか現れてくれないので、晁夫人に自分を済度してほしいと言った。

原文

晁夫人道^[1]：他死去^[2]一十二年，我那年^[3]在通州的時節^[4]，曾^[5]央^[6]香巖寺^[7]長老^[8]選^[9]了高僧替^[10]他誦^[11]了一千卷^[12]救^[13]苦難^[14]的《觀世音經》^[15]，難道^[16]他不曾^[17]托生，還在家裏。這六月初八日是他的忌辰^[18]，待^[19]我自己^[20]到他墳^[21]上囑贊^[22]他一番^[23]，再看如何^[24]。

校注

- [1] 道:[動] “说” 言う、話す、思う。《水滸》1: 當有殿頭官喝~: 有事出班早奏, 無事捲簾退朝。
- [2] 死去:[動] “去世;死亡” 死去する、死ぬ。《西遊》11: 一計唐王~, 已三晝夜, 復回陽間為君。
- [3] 那年:[連] “那年” その年、あの年。《醒世》9: 他~京裏坐監, 害起傷寒來。
- [4] 時節:[名] “时候” 時期、時。《平妖》23: 你前生做我的女兒~, 我同你到劍門山關王廟中避雪。
- [5] 曾:[副] “曾经” かつて、以前。《西遊》11: 朕~夜夢老龍求救, 實是允他無事。
- [6] 央:[動] “请求;拜托” 懇請する、頼む。《金瓶》47: 苗青恐懼, 轉~親鄰, 再三勸留得免, 終是切恨在心。
- [7] 香巖寺:[名] “寺庙的名字” 寺院名。《醒世》93: 晁梁到了~內, 與胡無翳相見, 甚是喜歡。
- [8] 長老:[名] “对有德行的老和尚的尊称或对主持僧的尊称” <宗> 高齡で徳が高い僧または住職の僧を指す。《水滸》4: 當下~自引了眾僧回寺。
- [9] 選:[動] “选择” 選ぶ。《儒林》28: 我小弟有二三百銀子, 要~一部文章。
- [10] 替:[介] “为;给” (…の) ために。《金瓶》89: 奴不記掛著~他燒張紙兒, 怎生過得去。
- [11] 誦:[動] “用高低抑扬的腔调念。这里指诵经” 抑揚をつけて読む。ここでは読経する。《金瓶》59: 到三日, 請報恩寺八眾僧人在家~經。

- [12] 卷:[量] “用于成卷的东西” 卷物を数える。《水滸》42: 這三～天書, 必然有用。
- [13] 救:[動] “给予帮助使其脱离困难或危险” 助ける、救う。《紅樓》82: 此事惟求老太太, 或還可～。
- [14] 苦難:[名] “苦痛和灾难” 苦しみ、苦難。《醒世》6: 他說觀音大士是救～的, 要指望觀音老母救他回西天去哩。
- [15] 《觀世音經》:[名] “佛经的名字” 仏教經典の一つ。
- [16] 難道:[副] “难道” まさか… (ではあるまいか)。《紅樓》9: ～有人家來的, 咱們倒來不得。
- [17] 不曾:[副] “没有” ……していない。《紅樓》51: 那大夫只見了園中的景致, 並～見一女子。
- [18] 忌辰:[名] “忌日” 命日。《醒世》92: 過了半月, 三月十五日, 晁夫人三年～。
- [19] 待:[動] “等候; 等待” 待つ、……してから。《水滸》4: 你等眾人且休疑心, ～我看一看。
- [20] 自己:[代] “自己” 自分。《西遊》83: 看你老人家面皮, 還教他～來解。
- [21] 墳:[名] “坟墓” 墓。《儒林》17: 那一日, 正從～上奠了回來, 天色已黑。
- [22] 囑贊:[動] “祈祷” 祈る。一般に同音語“祝贊”と記す。
- [23] 一番:[連] “一次; 一阵” ひとしきり。《西遊》42: ～搭上手, 鬥經四五個回合。
- [24] 如何:[代] “怎么; 怎么样” どのようなであるか。どうであるか。《醒世》77: 上上下下, 盡屬於我, 你～妄爭。

日本語訳

晁夫人は思った。計氏が死んで十二年になる。通州にいた頃、かつて香巖寺の住職に頼んで徳の高い僧を選び、彼女のために苦難を救う『觀世音經』一千卷を唱えてもらったことがあった。まさか彼女が生まれ変われずに、まだ家で彷徨っているとは! 六月八日は彼女の命日だから、彼女の墓参りをしてお祈りでもして、少し様子を見てみようか。

原文

到了忌日^[1], 晁夫人叫了人備^[2]了祭品^[3], 自己坐^[4]了轎^[5], 跟^[6]了家人^[7]媳婦^[8], 到墳上化了紙^[9]。晁夫人還着實^[10]痛哭^[11]一場^[12]囑說, 你兩次托夢^[13], 我是个老實人^[14], 不會家^[15]叅詳^[16], 又不知^[17]你待要^[18]如何。

校注

- [1] 忌日:[名] “忌日” 命日。《水滸》40: 明日是箇國家～, 後日又是七月十五日中元之節。
- [2] 備:[動] “准备” 用意する、備える。《西遊》92: 次日五更早起, 喚八戒～馬。
- [3] 祭品:[名] “祭祀用的物品” 祭祀に用いる品物。具体的には鶏肉、お茶、果物や紙錢など。《儒林》53: 那些～的器皿, 都是訪古購求的。
- [4] 坐:[動] “搭; 乘” (轎に) 乗る、搭乗する。《金瓶》32: 絕早～轎子先來, 要拜月娘做乾娘, 他做乾女兒。
- [5] 轎:[名] “轿子” かご、こし。《平妖》7: 分開眾人下了階, 上～抬著飛奔去了。
- [6] 跟:[動] “紧随其后; 跟着” 後ろからついて行く、従う。《醒世》88: 即時叫人替他開了鎖鑰, ～着家人見了李驛丞。
- [7] 家人:[名] “仆人” 使用人。《金瓶》70: 到次日各備禮物拜帖, ～跟隨, 早往蔡太師府中叩見。
- [8] 媳婦:[名] “已婚的女子” 既婚の女性。《儒林》4: 家人、～和丫鬢、娘子都慌了。
- [9] 化(了)紙:[連] “焚烧纸钱、钱錠” 冥錢や紙の冥器を焼く。《西遊》45: 說得那滿城人, 戶戶焚香,

家家～。

[10] 着實：[副] “确实；实在” 本當に、しっかりと、ひどく。《紅樓》6：他們家的二小姐～響快，會待人，倒不拿大。

[11] 痛哭：[動] “尽情哭泣” ひどく泣く、思い切り泣く。《水滸》52：親自到林子裡看了，～不已。

[12] (一) 場：[量] “一回；一番” 一場。《西遊》14：待老孫與他爭持～，看是何如。

[13] 托夢：[動] “亲友的灵魂出现在人的梦境中并有所嘱托” (親しい者が夢の中に現れ) 夢で知らせる、夢に託す。《醒世》69：頂上奶奶～給我，說為你來燒香。

[14] 老實人：[名] “老实的人；忠厚诚实的人” おとなしい人、まじめで温厚な人。《西遊》2：師父，我是個～，不曉得打市語。

[15] 家：[語尾] <= 价 >。

[16] 叅詳：[動] “考虑；琢磨” 詳しく調べる、詳細に検討する。《平妖》38：眾人曉夜～，全然不解其意。

[17] 不知：[動] “不知道” …かどうか分からない。《醒世》28：～怎樣的風俗，挑水的都盡是女人。

[18] 待要：[副] “打算；想要” …しようとする。…するつもりである。《儒林》13：～自己做出傷來，官府又會驗的出。

日本語訳

計氏の命日になり、晁夫人はお供え物を用意させ、自らは轎に乗り、下男と下女を従え、墓参りして、冥錢を焼いた。また、晁夫人はひどく泣きながら言い含めた。「あんたは二度もわたしの夢の中に現れたけれども、わたしは正直な人間なので、あんたの言うことがよく理解できなかったわ。あんたは一体何をしてほしいの？」

原文

你如果^[1]不曾^[2]托生，還^[3]在家裏，你待要^[4]如何^[5]，今日晚夜^[6]你明七白七^[7]托夢與我，我好^[8]依^[9]了你行^[10]，不得^[11]仍舊^[12]含糊^[13]。所以你的忌日，我特^[14]來與你燒紙^[15]。晁夫人焚了紙^[16]，奠過了酒^[17]，一个旋風^[18]，只管^[19]跟了晁夫人轉^[20]个不了^[21]。晁夫人回了家^[22]，夜間^[23]果^[24]又夢見計氏，還穿是前日^[25]的衣裳，謝^[26]晁夫人與他上墳^[27]燒紙。

校注

[1] 如果：[接] “假如” もし…。《水滸》39：正是應謠言的人，非同小可。～遲緩，誠恐走透了消息。

[2] 不曾：[副] “沒有” …していない。《水滸》2：王四應道：小人怎敢差遲，路上～住腳，一直奔回莊上。

[3] 還：[副] “仍旧；仍然” 今なお、やはり。《水滸》6：哥哥既有包裹在寺內，我和你討去。若～不肯時，一發結果了那廝。

[4] 待要：[助動] “打算；想要” …つもりである。《西遊》64：佳客莫者，趁此良宵，不要子～怎的。

[5] 如何：[代] “怎样；怎么” 如何に、どうであるか。《紅樓》23：賈政道：老太太～知道這話，一定是寶玉。

[6] 晚夜：[名] “夜晚” 夜。《西遊》81：不知是那山裏來的妖邪在這寺裏。我們～間…。

[7] 明明白白：[形] “明白；清清楚楚” はっきりと、明らかに。《金瓶》41：～聽見金蓮這邊打丫鬢，…。

[8] 好：[副] “表示在某种条件下才能够，才易于” …できる、…しやすい。《水滸》2：聚積些糧食在寨裏，防備官軍來時，～和他打熬。

[9] 依：[介] “依照；按照” …により。《西遊》40：三藏～言，策馬又進。

[10] 行:[動] “做;进行”する、手配する。《金瓶》20: 今後姐姐, 他~の事, 你休要攔他, 料姐夫他也不肯差了…。

[11] 不得:[連] “不可以;不准”…していけない。《紅樓》83: 親丁男人只許在宮門外遞個職名, 請安聽信, ~擅入。

[12] 仍旧:[副] “仍然;依旧”相変わらず、依然として。《儒林》1: 那官咨嗟歎息了一回, ~捧詔回旨去了。

[13] 含糊:[形] “不明确;不清楚”はっきりしていない、うやむやだ。《水滸》35: 晁蓋聽罷, 意思不信, 口裏~應道: 直如此射得親切…。

[14] 特:[形] “特地”もっぱら、わざわざ。《水滸》99: 小道與吾師為此稟過宋先鋒, ~到此拿他。

[15] 燒紙:[動] “焚化紙錢等以敬鬼神”紙錢を焼いて靈をまつ。《西遊》82: 小的們, 不論葷素, 拿來~。

[16] 焚紙:[連] “焚燒”紙を焼く、燃やす。[比較] “燒紙”は動詞、“焚紙”は連語。前者は“祭奠”(祀る)の意味も含む。《紅樓》65: 賈璉素服坐了小轎而來, 拜過天地, ~了紙馬。

[17] 奠(過了)酒:[動] “洒酒于地以祭鬼神”地面に酒をまく。昔、祭りで行った儀式の一つ。《紅樓》53: 青衣樂奏, 三獻爵, 拜興畢, 焚帛~, 禮畢, 樂止, 退出。

[18] 旋風:[名] “作螺旋状的疾風”つむじ風。《西遊》68: 朝巽地上吸口仙氣吹來, 立起一陣~, 將人都吹散。

[19] 只管:[副] “一味;一直”…しているばかりである。《醒世》40: 這隻怪眼, 從頭裏~跳。

[20] 轉:[動][zhuàn] “旋轉”ぐるぐる回る。《水滸》3: 直到晁老學與他這些光景, 他方略略有些~頭, 一連又重發了五六場, 漸漸減退。

[21] .. 不了:[接尾] “未完;没完”動詞について量的に完了・完結しきれないという意を添える。《醒世》8: 鬆開了頭髮, 叫皇天、罵土地、打滾、碰頭, 撒潑個~。

[22] 回(了)家:[動] “回家”家へ帰る。《醒世》100: 混混了兩日, 打發了這夥婆娘~。

[23] 夜間:[名] “夜里”夜間、夜。《水滸》32: 卻恨又是仲冬天氣, 風霜正寒, ~寒冷, 難以打熬。

[24] 果:[副] “果然”果たして、やはり。《西遊》77: 三賢弟有力量, 有智謀, ~成妙計, 拿將唐僧來了。

[25] 前日:[名] “先前;前些日子”先日。《金瓶》39: 穿著器用, 均比~不同。

[26] 謝:[動] “向人表示感谢”礼を言う、感謝する。《平妖》22: 每人又得了二兩銀子, ~了員外出來。

[27] 上墳:[動] “到坟前进行祭奠活动”墓参りする。《醒世》22: 可說這房子, 我都不給你們, 留着去~。

日本語訳

もし生まれ変わってなくて、ずっと家にいれば、あんたはどうするつもりなの。今夜私の夢に現れて、はっきり言付けてね。私はあんたの言う通りに手配するから。この前のようにうやむやにしてはいけないよ。だから、おまえの命日に、わざわざ紙錢を燃やしに来たのよ。」晁夫人が紙錢を燃やし、地面に酒をまくと、小さなつむじ風が晁夫人にまわりついて離れなかった。晁夫人は家に帰り、夜には果たして計氏を夢見た。計氏はまた先日と同じ衣装を着、晁夫人が自分のために墓に行行って冥紙を焼いてくれたことに対して感謝した。

原文

說他這十二年, 時刻^[1]還在那門樓^[2]底下^[3]等守^[4]。要^[5]尋^[6]一个替身相代^[7], 來往^[8]出入^[9]的人

都是有着實^[10]的旺氣^[11]，我又不敢^[12]近^[13]他；略^[14]有些晦氣^[15]的，我剛^[16]要上前，那宅神^[17]又攔阻^[18]，不許我動手^[19]。我只得^[20]央^[21]那宅神，訴^[22]我的冤苦^[23]，求^[24]他容^[25]我尋个替代，好去出世^[26]。

校注

[1] 時刻：[副] “每时每刻；经常” いつも、常に。《紅樓》88：侄兒從前承孀娘疼愛，心上～想著，總過意不去。

[2] 門樓 (=樓)：[名] “大门上边牌楼式的顶” 表門のところ。《水滸》50：其餘的都守莊院，～前納喊。

[3] 底下：[名] “下面；下方” 下、下の方。《西遊》62：偷了王母娘娘的九葉靈芝草，養在那潭～。

[4] 等守：[動] “等待；等候；守着” ずっと待つ。《初刻》10：…小姐全然不以為意，安心～。

[5] 要：[助動] “想要” (…し) たがる、…する意志がある。《水滸》101：那女子要～看景致，不用竹簾。

[6] 尋：[動] “寻找” 探す、求める。《西遊》43：我認得他那裏，等我～師父去。

[7] 相代：[副] “替代” 代わる。

[8] 來往：[動] “来和去” 往来、行き来する。《儒林》14：裏裏外外，～不絕，都穿的是錦繡衣服。

[9] 出入：[動] “出去与进去” 出入りする。《金瓶》78：彼往來出～，帶的花心，紅如鸚鵡舌。

[10] 着實：[形] “确实；真正” 本當に、確かに。《紅樓》57：故有時或作佯狂之態，紫鵲自那日也～後悔。

[11] 旺氣：[名] “阳气” 旺盛な生命力、元氣であること。《醒世》66：那平日的～不知那裏去了。

[12] 不敢：[連] “没有勇气做某事” …する勇氣がない。《金瓶》94：春梅倘在床上，面朝裡睡，又～叫。

[13] 近：[動] “接近” 接近する。《平妖》34：張鸞原是天閻，～不得女色，辭而不受。

[14] 略：[副] “稍微” 少し。《紅樓》4：他聽如此說，方才～解憂悶，自為從此得所。

[15] 晦氣：[形] “晦暗不祥的气色” 元氣がなく暗い。《歧路》7：但臥蠶之下，微有～，主目下事不遂心些。

[16] 剛 [jiang]：[副] “表动作行为仅及恰好某一范围” ちょうど。《紅樓》22：～到門檻前，黛玉便推出來，將門關上。

[17] 宅神：[名] “家的守护神” 家の守護神、家の守り神。《醒世》3：幸得你們父子俱正在興旺的時候，門神～俱不放他進來。

[18] 攔阻：[動] “阻挡” 阻止・邪魔する。《金瓶》16：我趕眼錯就走出來，還要～，又說好說歹，放了我來。

[19] 動手：[動] “下手” 手を出す。[比較] ここでは“附身” (体にとり憑く)。《兒女》10：他一看就知是個走路的行家，便不～了。

[20] 只得：[副] “只好；不得不” 仕方なく、やむなく。《二十》2：我想這件事本來沒有憑據，不便多說，～回來告訴了母親，把這事攔起。

[21] 央：[動] “恳求” 懇願する。《歧路》13：他如今沒過的，這個閨女～我替他賣了。

[22] 訴：[動] “诉说” 訴える。《水滸》22：酒至半酣，三人各～胸中朝夕相愛之念。

[23] 冤苦：[名] “冤屈痛苦” 無実の苦しみ。《水滸》98：瓊英也把向來～，備細訴說。

[24] 求：[動] “恳请” 求める。《金瓶》54：玳安道：無錢課不靈，定～收了。

[25] 容：[動] “允许；许可” 許す。《紅樓》50：今日斷乎不～你再作了。

[26] 出世：[動] “托生；转世” 転生する。《喻世》31：將人犯逐一喚過，發出投胎～。

日本語訳

自分は、この十二年間いつも表門のところの下で待っていたと言った。身代わりになる誰かを探し

ていたのですが、出入りする人々はすべて実に元気で生命力に溢れていたのです、彼らに近付くことができませんでした。少々元気の無い人がいて、あたしが近づこうとすると、家の守護神が邪魔して手を出すことを許してくれません。そこで、あたしは家の守護神様に無実の苦しみを訴え、身代わりの者を一人探し、転生することができるようにしてくれと頼んだのです。

[注]

1) 分担は、1人200字～400字の原文を担当し、校注構成メンバーの論議を経て何度も修正、最終的に植田均が調整した。したがって誤謬等の責任は全て植田均にある。大方の叱正を賜れば幸いである。

Notes to *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chapter 30.vol.2)

Ueda Hitoshi, Hu Yuhua, Shi Liangliang, Wang Shuyin, Wang Tao, Zhong Lihua, Zhang Enpei, Jiang Bingyan

Xingshi Yinyuan Zhuan is a full-length novel with 100 chapters, written in Shangdong dialect. Its writer is from Shangdong Province but his name and life story still remain unknown. We annotate the words/ phrases the novel and include ‘comparison’ this time. Modern Chinese Research Class students from Kumamoto University are investigating all the words/phrases occurring in the representative works produced in northern mandarin area in Qing Dynasty and currently are working on all the words/phrases from *Xingshi Yinyuan Zhuan*. That is to say, the essay aims to expound ‘the rate of a certain word/ phrase corresponding to its meaning’, and researches on the quantitative linguistics with figures counting frequencies.

Textual Research of *Xingshi Yinyuan Zhuan* from Hu Shi(1993) and Huang Suqiu (1981) contribute greatly to the annotation. Recently the Historical Evolution of the Dialect of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chao Rui, 2014) and Dialect Vocabulary Dictionary of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Hitoshi Ueda, 2016) have been published one by one.